

再雇用についての希望 職種別・男性

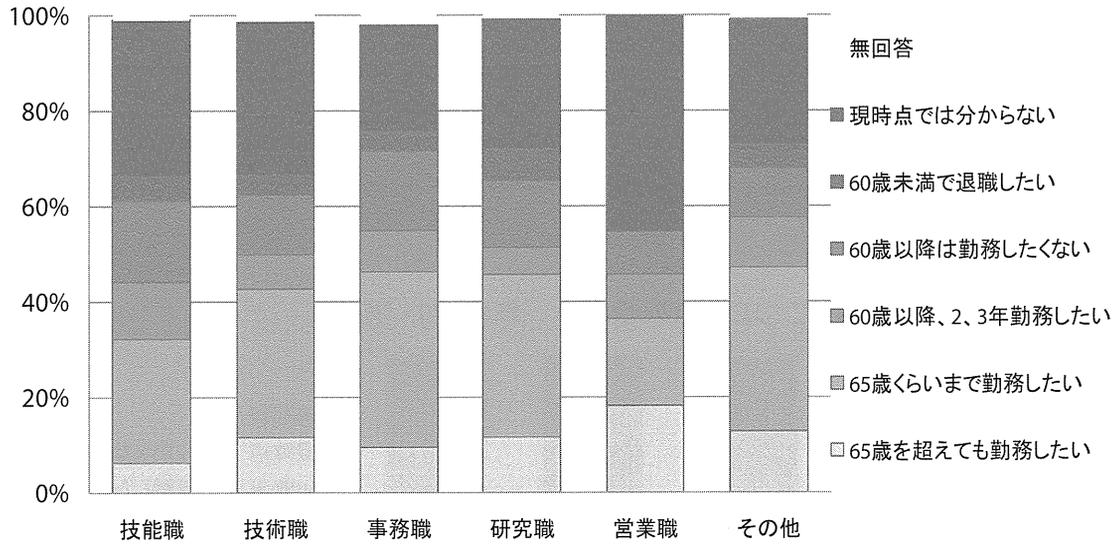


図3-56 60歳以上の再雇用に関する希望 職種別・男性、N=2,485

再雇用についての希望 職種別・女性

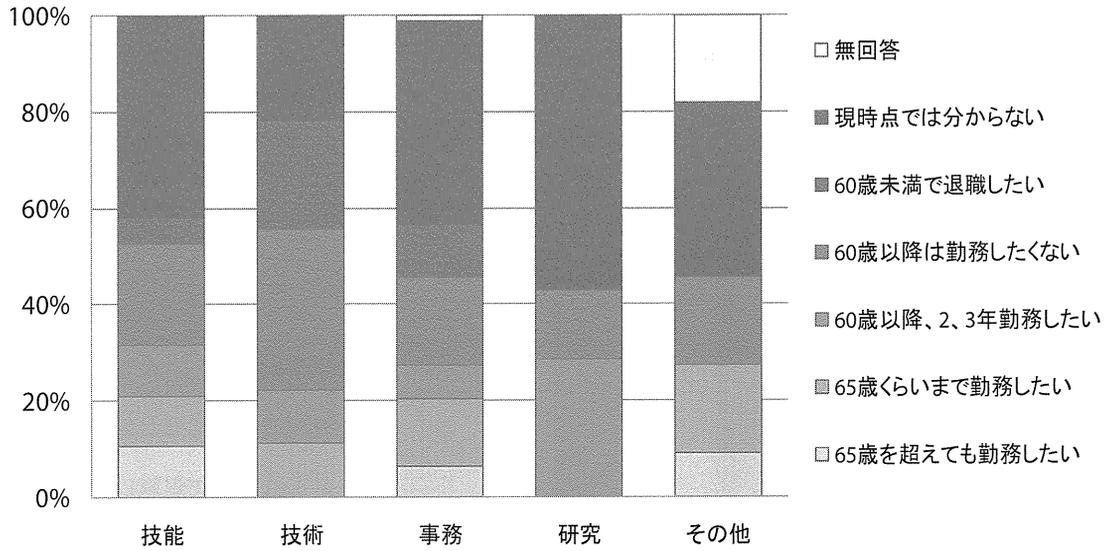


図3-57 60歳以上の再雇用に関する希望 職種別・女性、N=204

(エ) 会社があなたの再雇用の可否を判断する手続きに関するあなたの意見はいずれですか？
 (複数選択) (図 3-58~61)

再雇用の可否を判断する際に、事業者が在職中の労働者の健康情報を利用することに対する労働者の意見を尋ねた。男性では、人事が産業医に意見を尋ねること、健康診断を実施すること、過去の健康記録を参照すること、過去の病欠や休職の履歴を参照することなど、在職中の健康情報を判断材料として利用することに肯定的な意見が、60歳までは年齢とともに上昇していく傾向がみられたが、いずれの項目も50%を超えるものはなかった。一方女性では、30歳代で肯定的な意見が低下し、その後わずかに上昇する項目が多かった。最も受け入れられやすかった項目は健康診断の実施で男性が38%、女性が34%であった。次いで高かったのは、人事が産業医の意見を尋ねることによって男性が21%、女性が20%であった。改めて健康状態を評価すべきでないという意見は男女それぞれ5%、4%と低かった。

職種別でも、すべての職種で最も受け入れられやすかった項目は健康診断の実施だった。その他、職種による大きな傾向の違いはみられなかった。

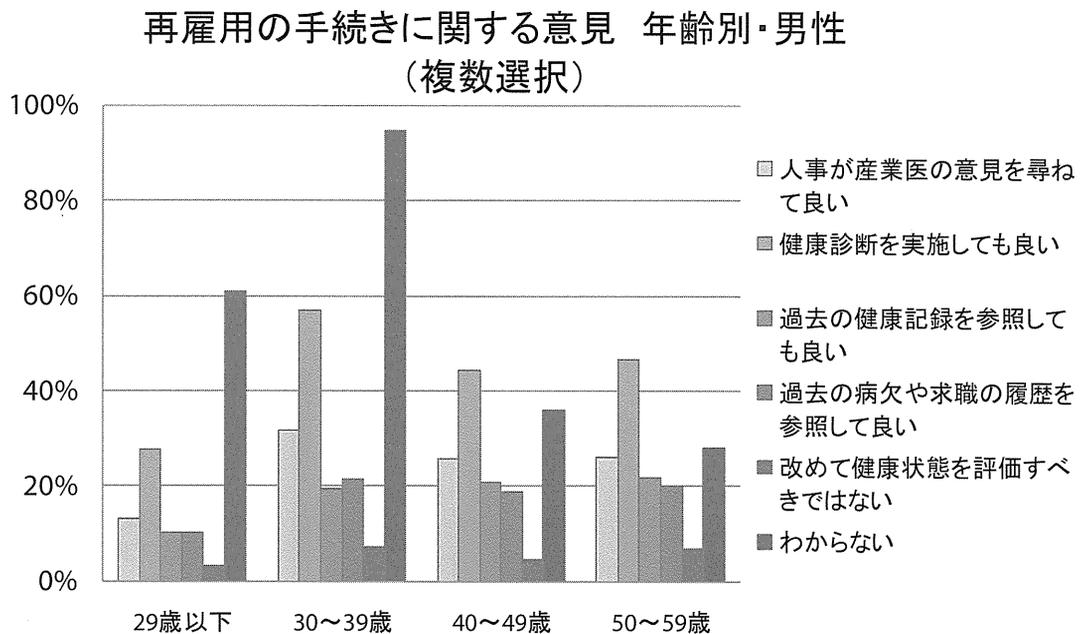


図 3-58 再雇用の手続きに関する意見 年齢別・男性 (複数選択)、N=2,485

再雇用の手続きに関する意見 年齢別・女性 (複数選択)

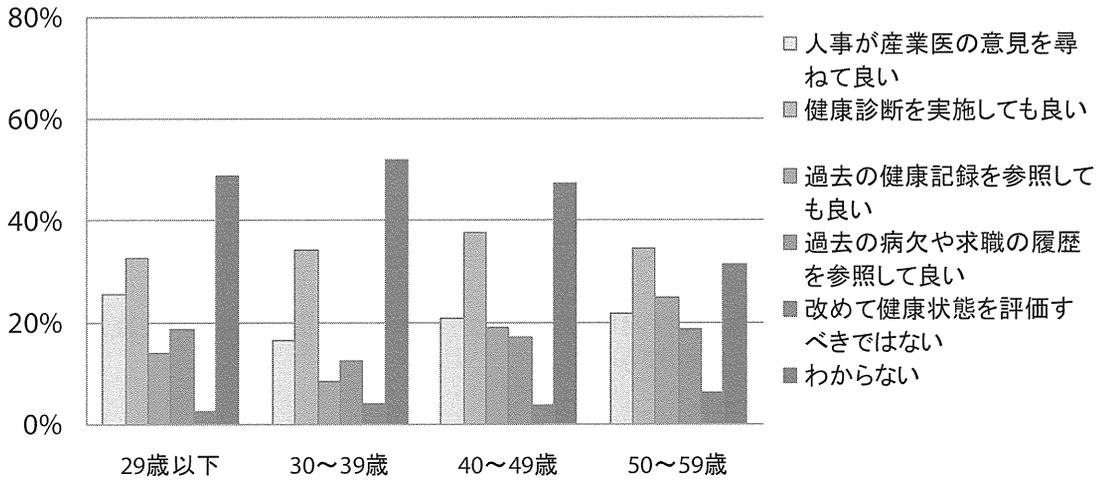


図3-59 再雇用の手続きに関する意見 年齢別・女性 (複数選択)、N=204

再雇用の手続きに関する意見 職種別・男性 (複数選択)

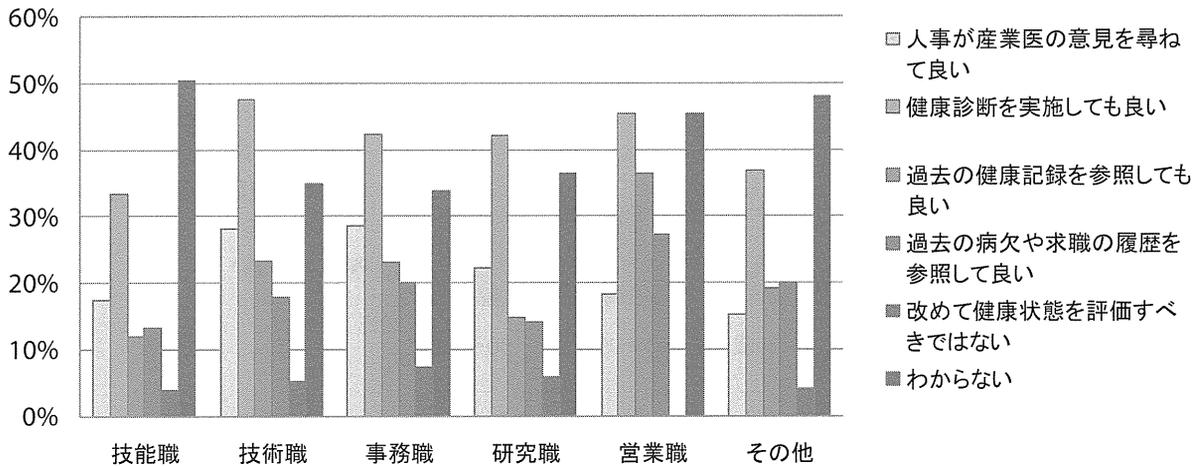


図3-60 再雇用の手続きに関する意見 職種別・男性 (複数選択)、N=2,485

再雇用の手続きに関する意見 職種別・女性
(複数選択)

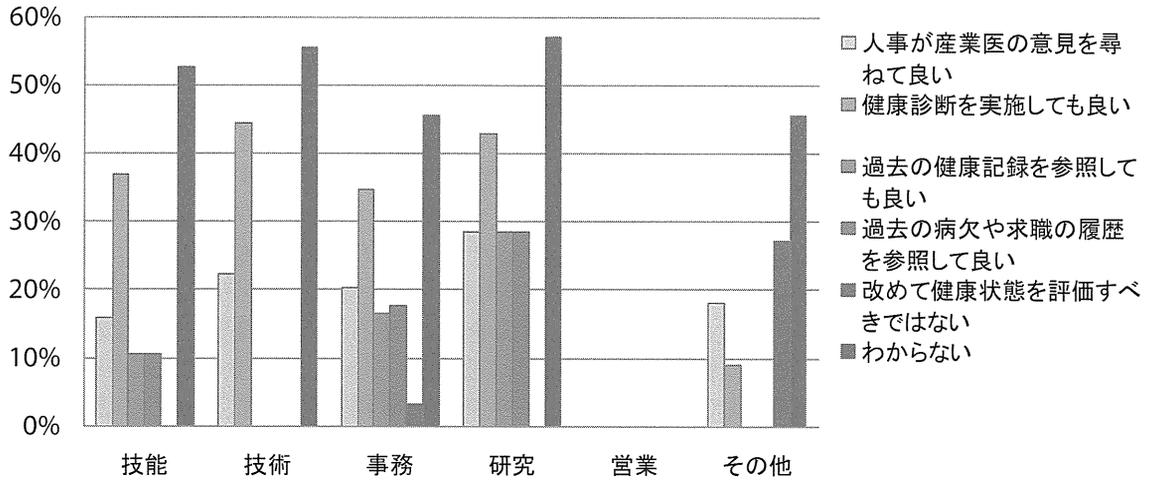


図 3-6 1 再雇用の手続きに関する意見 職種別・女性 (複数選択)、N=204

(オ) 再雇用された場合の働き方に関するあなたの希望はどれですか？（複数選択）

(図 3-62~65)

再雇用後の働き方に関して、男性では全年齢において、これまでの技能、知識、経験を活かせる仕事を希望するものが 33~55%と最も多く、年齢が上がるにつれてその割合は増加した。再雇用に際して、改めて教育や訓練を受けることを希望するものは 2~4%とわずかであった。また、心理的ストレスや身体的負荷の少ない業務、あるいは労働時間が短い業務を希望すると回答したものは、いずれも 40 歳代をピークに上昇し、その後低下していた。女性では、男性ほど一定の傾向はみられなかったが、同様にこれまでの技能、知識、経験を活かせる仕事を希望するものが 33~45%と最も高く、再教育や再訓練の希望は 0~8%と低かった。これまでよりも心理的ストレスの少ない仕事を希望するものは、男性同様 40 歳代がもっとも高かったが、その他の身体的負荷、労働時間については、年齢が上がるにつれむしろ低下し、50 歳代で再び上昇する傾向がみられた。

男性の職種別では、いずれの職種でも技能、知識、経験を活かせる仕事を希望するものが 38~64%と最も多かったが、次いで事務職、技術職、研究職では心理的ストレスの少ない業務を希望するものが 29~42%と高く、営業職、技能職では身体的負荷の少ない業務を希望するものの割合が 27%、30%と高かった。女性の職種別では研究職において、心理的ストレスの少ない業務と回答した者が 43%と最も高くそれ以外の技能、技術事務職では男性同様、技能、知識、経験を活かせる仕事を希望するものが 42~44%と最も高かった。2 番目に高かった項目は職種によりさまざまであり、技能職では短時間の業務の 32%、技術職、研究職では身体的負荷の少ない業務 22~29%、事務職では心理的ストレスの少ない業務 41%などであった。

再雇用後の働き方に関する希望 年齢別・男性
(複数選択)

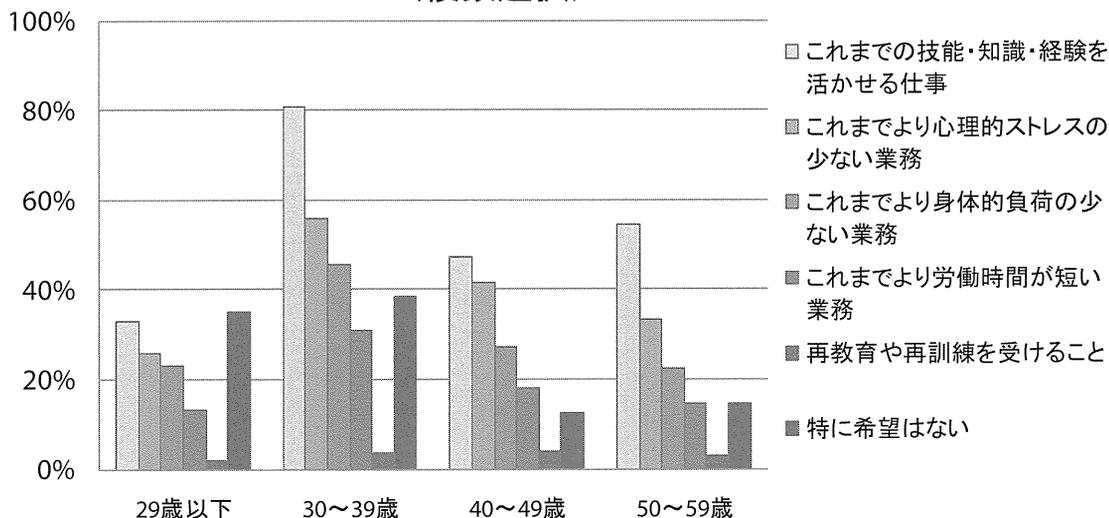


図 3-62 再雇用後の働き方に関する希望 年齢別・男性 (複数選択)、N=2,485

再雇用後の働き方に関する希望 年齢別・女性
(複数選択)

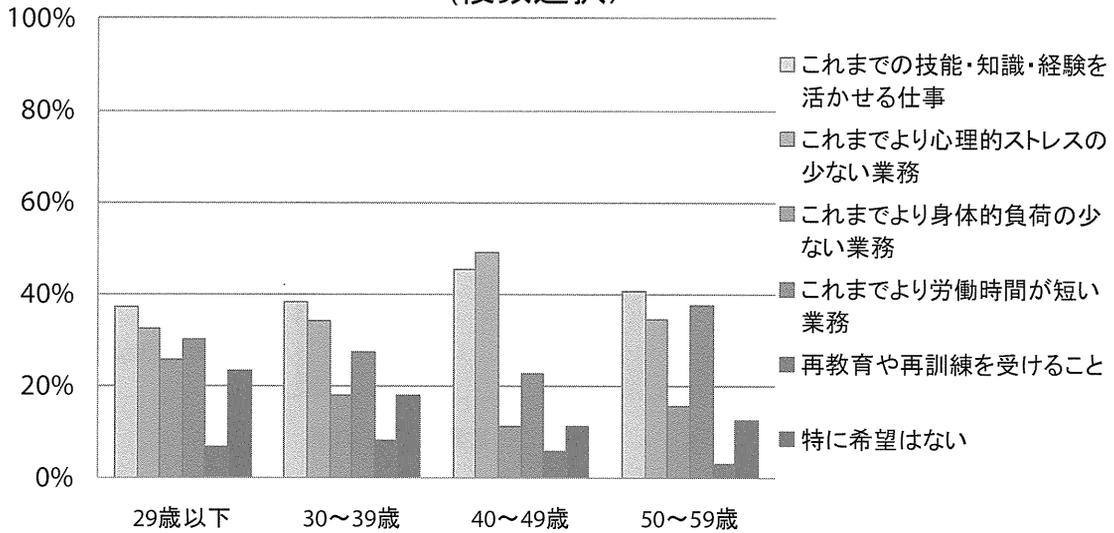


図3-63 再雇用後の働き方に関する希望 年齢別・女性 (複数選択)、N=204

再雇用後の働き方に関する希望 職種別・男性
(複数選択)

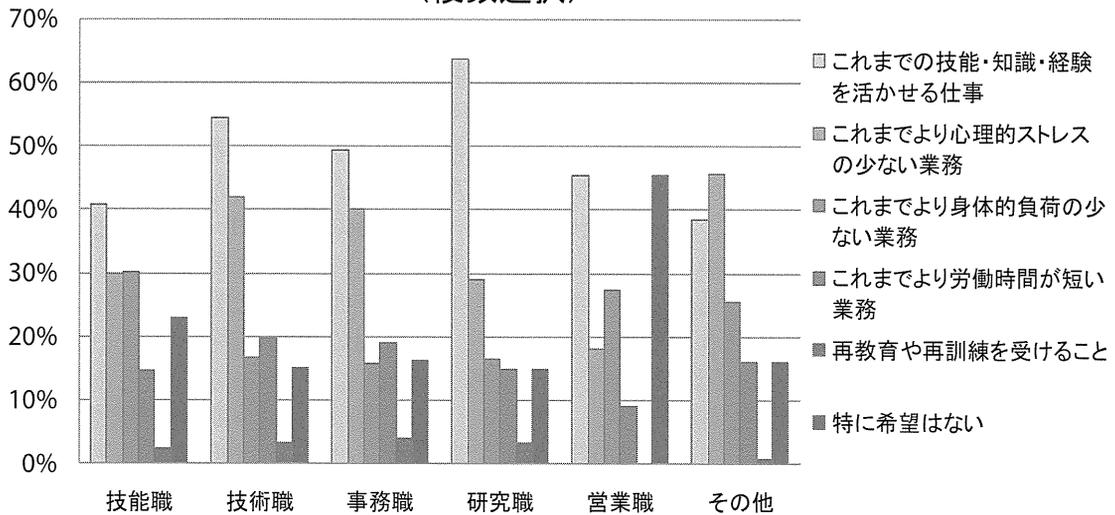


図3-64 再雇用後の働き方に関する希望 職種別・男性 (複数選択)、N=2,485

再雇用後の働き方に関する希望 職種別・女性 (複数選択)

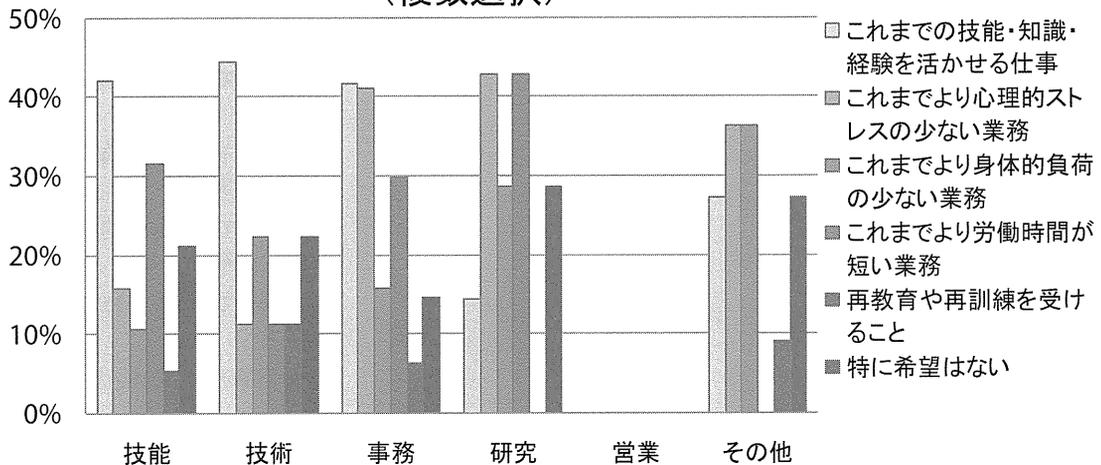


図3-65 再雇用後の働き方に関する希望 職種別・女性 (複数選択)、N=204

3-5-3. 考察

1. 定年退職後の働き方については、生活基盤の状況で異なってくるのではないかと考え、60歳から公的年金受給可能年齢までの生活資源について尋ねたが、非公的年金などの割合は低く、貯金の取り崩しと答えたものが過半数だった。男性で65歳まで働きたいという者が最も多かったことは、このような公的年金支給開始の時期と関連していると考えられた。
2. 現在の仕事に必要とされる能力は、男性ではいずれの職種でも専門分野の経験や知識が46~100%と最も高く、その他では、職種の特徴がよく表れた結果であった。女性においても同様であったが、技能職では男性と比較し身体の筋力と持久力ではなく手先の正確な動作や目や耳の感覚を挙げるものも目立ち同じ職種でも男女差の特徴が表れていた。
3. 労働者の再雇用を判断する際に、事業者が保有する現在や過去の労働者の健康情報が用いられることがあると予想される。しかしこれは本来、健康管理のために得た情報を目的外に使用している状態とも解すことができ、その取扱いについては慎重に検討すべきである。このような情報の取り扱いについて労働者がどのような意識を持っているかを知る目的で、再雇用の手続きに関する意見を尋ねた。その結果、約半数がわからないと回答したものの、その他では、健康状態を評価すべきでないという意見は5%と低く、再雇用の可否を判断する上で健康状態を考慮することはある程度必要と認識されていると考えられた。その中でもっとも受け入れられやすかったものは、健康診断を実施すること35%であり、過去の健診記録や病歴を参照することについては15~17%と低く、過去の健康情報まで利用することには抵抗があるものが多いと考えられた。産業医の意見を聴取することを可とするものは20%程度に留まった。
4. 再雇用後の働き方については、どのような働き方を将来の理想と考えているかを知る目的で質問したが、実際にはそれ以外に、現在の業務で負担に感じていることが結果に反映されている様子がみられた。例えば、男性の年齢別で心理的ストレスや身体的負荷の少ない業務、あるいは労働時間が短い業務を希望すると回答したものは40歳代をピークに上昇し、その後低下していた。この年代はワークライフの中で最も責任や業務負荷が大きくなる時期と推測され、その負担感が影響している可能性が考えられた。同様に職種別で、技能職・営業職といった身体活動性の高いと考えられる職種では身体的負荷の少ない業務を、事務職、技術職、研究職のようなデスクワークでは逆に心理的ストレスの少ない業務を希望するものが比較的多かった。女性においては、身体的負荷の少ない業務や短時間業務を希望する者が50歳代で上昇しており、体力の低下などの要因が考えられた。

3-5-4. まとめ

労働者の再雇用に対する希望や意識について調査を行った。どのような働き方をいつごろまでしたいかは、性、年齢、職種、労働者の置かれている状況により異なる傾向が認められると考えられた。エンプロイヤビリティをセルフチェックする場合、このような労働者の背景も要素として取り入れられると、本人の希望する再雇用への適応を評価するツールとしてより望ましいものになると考えられた。

また、再雇用に際して健康状態を雇用者が検討することを否定する労働者は少なく、健康診断を実施することにも一定の理解があったが、過去の健康情報や産業の意見を参考にすることについては、賛成する者は少なく既存の健康情報をどのように利用していくかは今後さらに検討する必要があると考えられた。

第4章 質問紙調査

生活機能や労働能力を保持・増進するための前提条件を把握することを目的とした自記式質問紙調査を実施した。調査期間は平成22年10月から11月である。

調査内容は、①基本的属性・生活習慣、②従事している仕事の内容、③労働適応能力 (Work Ability Index)、④疲労様態、⑤ヒヤリ/ハットの経験、⑥就業意欲、⑦現在及び過去の運動習慣、⑧自覚的な体力低下、⑨メンタルヘルスの状況である。

4-1. 調査対象

調査対象は大型自動車製造を主とするM社のT工場、および自動車製造設備/金型製造を主とするT社T工場に勤務する労働者である。調査の実施に際しては、各企業の産業医を通じて口頭および文書による調査主旨説明を行い、最終的な調査参加の同意を得た上で実地測定調査を実施した。また倫理的配慮として、本研究の研究計画及び研究方法について産業医科大学倫理委員会の承認を得た。

4-2. 分析方法

量的変数間の線型的な関連性の検討には Pearson の相関係数 (r) を用いた。一方の変数がリッカートスケールのような順序尺度変数の場合における線型的な関連性の検討には Spearman の順位相関係数 (ρ) を用いた。2つの名義尺度変数間の関連性の検討には χ^2 乗検定を用いた。 χ^2 乗検定が有意であった場合の Post Hoc Analysis として、各セルの調整済み標準化残差を算出した。調整済み標準化残差の絶対値が 1.96 以上の場合を有意とした。2水準の名義尺度変数間の関連性の検討には Fisher の直接確率法を用いた。名義尺度変数と量的変数との関連性の検討には一元配置分散分析を用いた。なお、名義尺度変数の水準が2つの場合は t 検定 (Student's t -test) を用いた。3変数以上の関連性の検討には、すべての変数が量的変数の場合、重回帰分析を用いた。独立変数(説明変数)が名義尺度変数のみの場合は分散分析を用いた。独立変数に量的変数と名義尺度変数を含む場合は共分散分析と一般化線型モデル (Generalized Linear Model: GLM) を用いた。

4-3. 結果

自記式質問紙を実施した結果、2502名から調査票を回収した。以下に分析の結果を示す。

4-3-1. 基本的属性・生活習慣

1) 年齢・性別

分析対象における平均年齢は42.5歳（標準偏差11.4）であった。性別の内訳は、男性2390名（95.5%）、女性92名（3.7%）、無回答20名（0.8%）であった。年齢と性差の関連についてt検定により検討したところ、有意差がみられた（ $p < .001$ ）。男性の平均年齢（ 42.8 ± 11.3 歳）は、女性と比較し（ 32.6 ± 8.7 歳）、高い傾向がみられた。婚姻状況については、未婚721名（28.8%）、既婚1625名（64.9%）、再婚47名（1.9%）、離婚74名（3.0%）、無回答35名（1.4%）であった。

2) 体格・肥満

体格については、男性において平均身長170.4cm（標準偏差5.8）、平均体重67.0kg（標準偏差10.3）、平均BMI23.0（標準偏差3.1）であった。女性においては平均身長158.5cm（標準偏差4.8）、平均体重51.3kg（標準偏差7.5）、平均BMI20.4であった。年齢とBMIとの相関係数は男性において $r = .141$ （ $p < .001$ ）、女性において $r = .074$ （ $p = .502$ ）であった。BMIが25以上の割合は、男性において20.6%（492名/2390名）、女性において6.5%（80名/92名）であった。

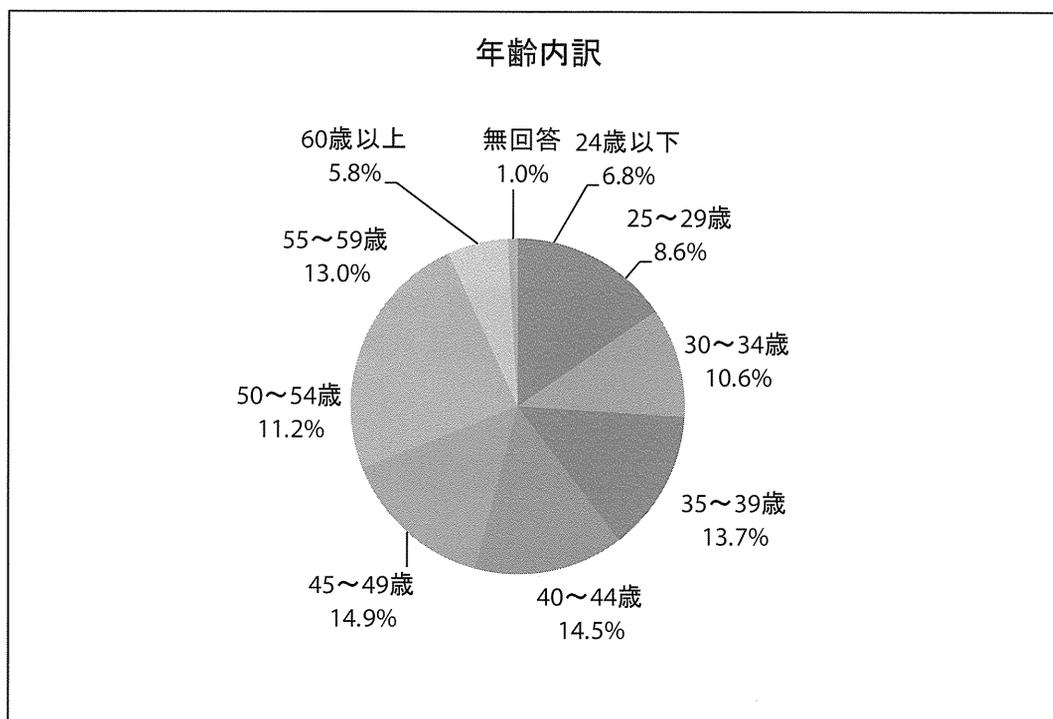


図4-1 年齢構成

3) 生活習慣

勤務日における睡眠時間の平均は 6.3 時間 (標準偏差 0.9) であった。年齢との相関係数は $r = .101$ ($p < .001$) であった。休日および休日前日の睡眠時間の平均は 7.2 時間 (標準偏差 1.3) であった。年齢との相関係数は $r = -.130$ ($p < .001$) であった。

飲酒習慣について、「飲まない」と回答した者は 744 名 (29.7%)、「月に数回飲む」442 名 (17.7%)、「週に数回飲む」510 名 (20.4%)、「毎日飲む、又は、ほとんど毎日飲む」788 名 (31.5%)、無回答 18 名 (0.7%) であった。

喫煙習慣について、「現在、吸っている」と回答した者は 885 名、「以前は吸っていたが、現在はやめている」889 名 (35.5%)、「今まで吸ったことはない」710 名 (28.4%)、無回答 18 名 (0.7%) であった。

分析対象を 45 歳以上と 45 歳未満の 2 群に分類し、飲酒習慣との関連性を χ^2 -test により検討したところ、有意差がみられた ($p < .001$)。45 歳未満では「飲まない」「月に数回飲む」割合が期待値よりも有意に高く、45 歳以上では「毎日、又はほとんど毎日飲む」割合が期待値よりも有意に高かった。同様に喫煙習慣との関連性を検討したところ、有意差がみられた ($p < .001$)。45 歳未満では「今まで吸ったことがない」割合が期待値よりも有意に高く、45 歳以上では「以前は吸っていたが、現在はやめている」割合が期待値よりも有意に高かった。

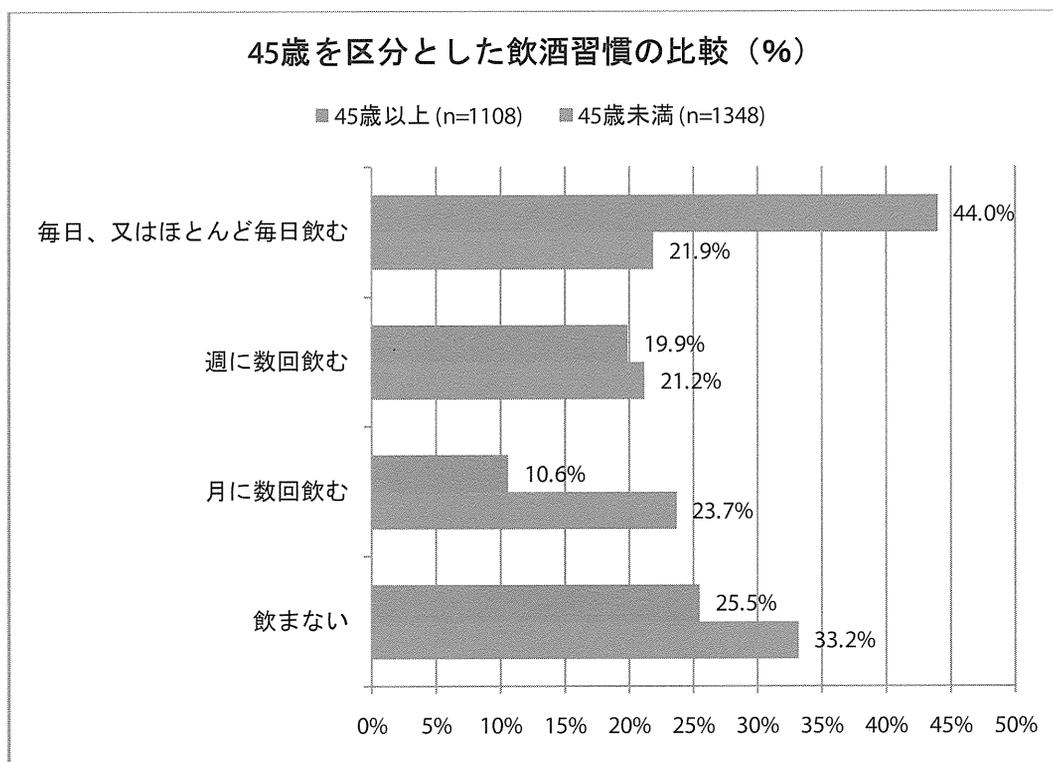


図 4-2 飲酒習慣の比較 (45 歳区切り)

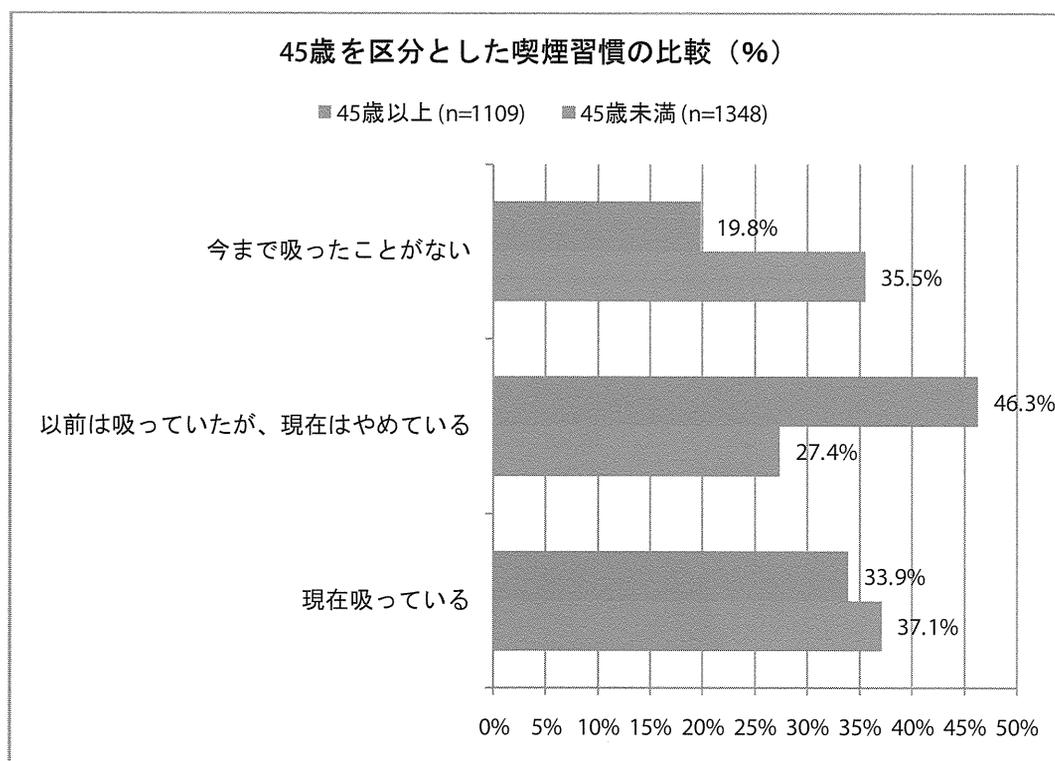


図 4-3 喫煙習慣の比較 (45 歳区切り)

4-3-2. 従事している仕事の内容

1) 職種・職務

分析対象における職種の割合は、管理監督職 8.3% (207 名/2502 名)、事務 5.3% (132 名/2502 名)、技能・現業作業 71.4% (1786 名/2502 名)、技術 9.8% (245 名/2502 名)、その他 4.8% (120 名/2502 名)、無回答 0.5% (12 名/2502 名) であった。職務 (業務内容) としては、「主に体を使う業務」26.2% (656 名/2502 名)、「主に頭を使う業務」33.4% (836 名/2502 名)、「体・頭の両方を使う業務」39.2% (981 名/2502 名) であった。

2) 雇用形態

雇用形態の内訳は、正社員 92.7% (2320 名/2502 名)、パート 0.2% (4 名/2502 名)、派遣 1.1% (27 名/2502 名)、嘱託 3.2% (80 名/2502 名)、受入もしくは応援出向 1.6% (40 名/2502 名)、その他 0.9% (22 名/2502 名) であった。また、分析対象のうち定年後再雇用の者は 6% (150 名/2502 名) であった。

3) 勤続年数・従事年数

現在の会社における勤続年数の平均は 21.6 年 (標準偏差 12.5) であった。また、現在の職場・業務における従事年数の平均は 9.3 年 (標準偏差 10.5) であった。

4) 勤務時間・有給休暇の取得日数・休日出勤の状況

直近 1 ヶ月における平均的な勤務時間は 8.3 時間 (標準偏差 1.4) であった。年齢との相関係数は $r = -.052$ ($p = .009$) であった。また、過去 1 年間における有休取得日数の平均は 16.4 日 (標準偏差 6.5) であった。年齢との相関係数は $r = .399$ ($p < .001$) であった。直近 1 ヶ月における休日出勤日数の平均は 0.38 日 (標準偏差 0.84) であった。年齢との相関係数は $r = -.020$ ($p = .329$) であった。

4-3-3. 労働適応能力 (Work Ability Index)

Work Ability Index (WAI) を用いて労働適応能力の評価を行った。WAI 項目に欠損値が含まれなかった 1807 名における WAI スコアの平均は 40.3 (標準偏差 4.8) であった。WAI カテゴリの内訳は、Excellent 27.2% (491 名/1807 名)、Good 52.9% (955 名/1807 名)、Moderate 18.8% (340 名/1807 名)、Poor 1.2% (21 名/1807 名) であった。年齢と WAI スコアとの相関係数は $r=-.088$ ($p<.001$) であった。

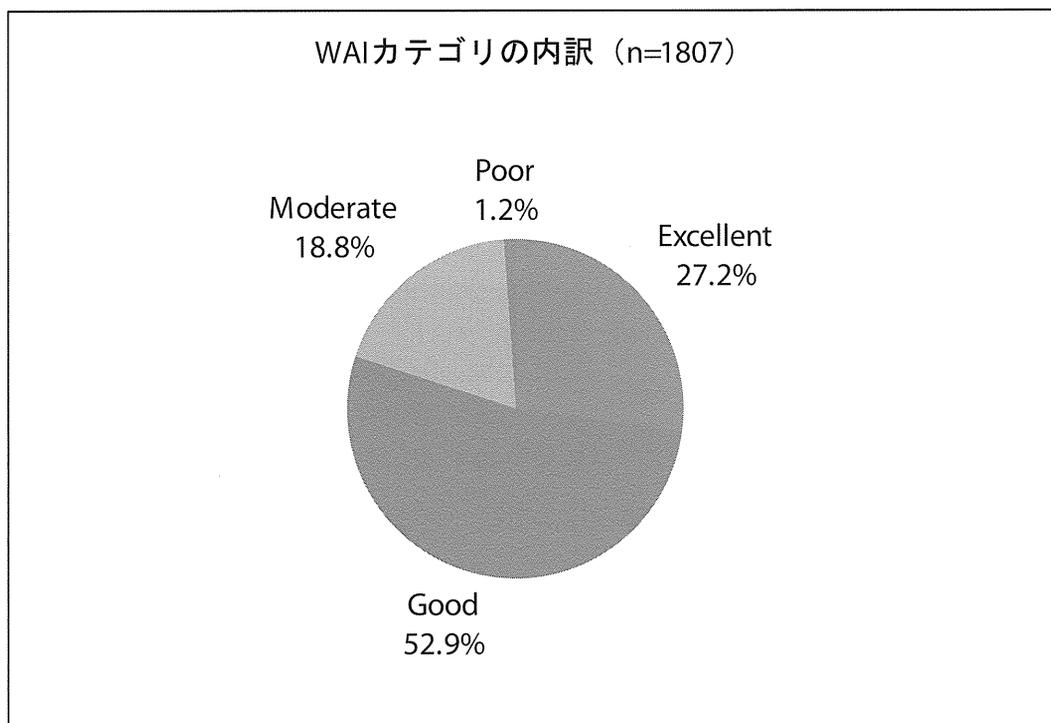


図 4-4 労働適応能力 (Work ability Index カテゴリ) の内訳

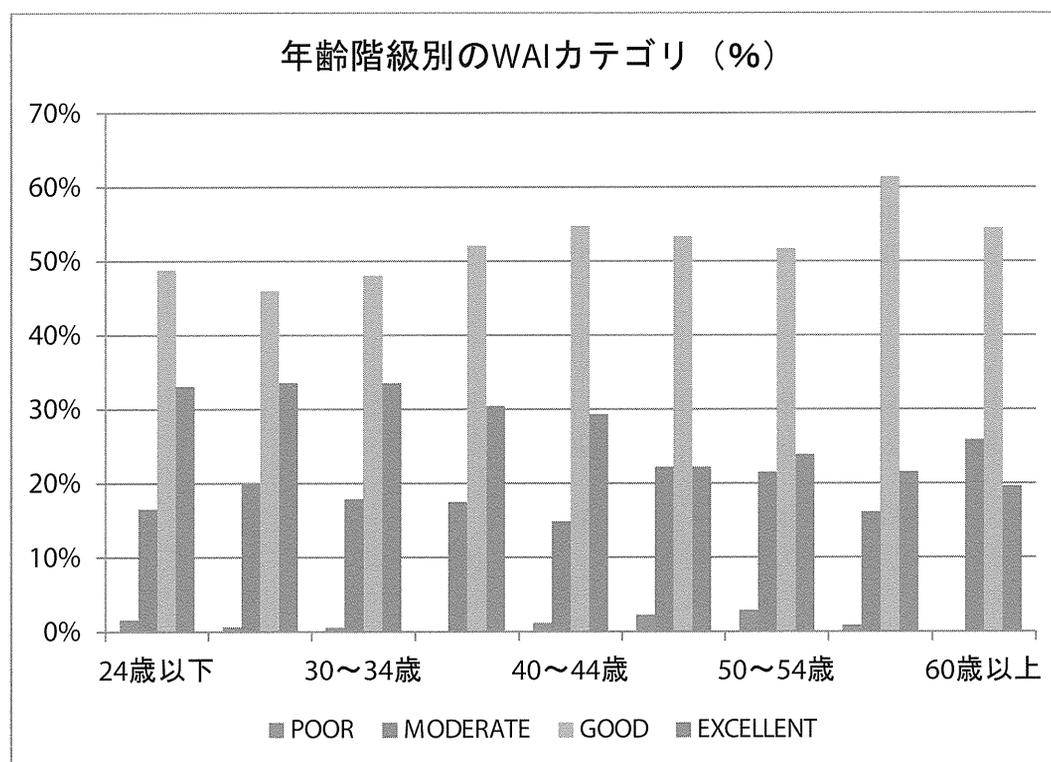


図 4-5 年齢階級別の WAI カテゴリ

4-3-4. 疲労様態

1) 「仕事の疲れが次の日まで取れないことがありますか」

このという設問に対して、「全くない」と回答した者は 250 名 (10.0%)、「あまりない」と回答した者は 913 名、「ときどきある」と回答した者は 1063 名 (42.5%)、「日常的にある」と回答した者は 229 名 (9.2%)、無回答 47 名 (1.9%) であった。

分析対象を 45 歳以上と 45 歳未満の 2 群に分類し、この設問に対する応答との関連性を χ^2 -test により検討したところ、有意差がみられた ($p < .001$)。45 歳未満では「日常的にある」「ときどきある」と回答する割合が期待値よりも有意に大きいことが示された。一方、45 歳以上では「全くない」「あまりない」と回答する割合が有意に高いことが示された。

同様に WAI カテゴリとの関連性について検討したところ、有意差がみられた ($p < .001$)。Excellent では「全くない」「あまりない」と回答する割合が期待値よりも有意に大きいことが示された。一方、Moderate では「ときどきある」「日常的にある」と回答する割合が期待値よりも有意に高く、Poor では「日常的にある」と回答する割合が期待値よりも有意に高いことが示された。

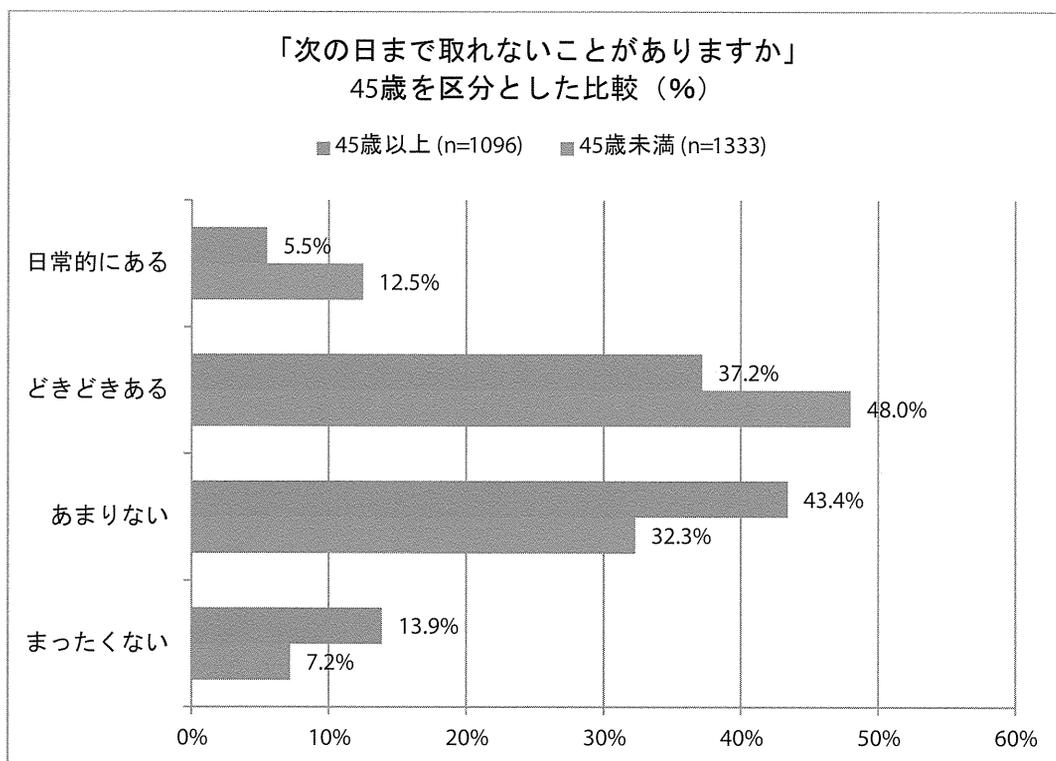


図 4-6 慢性疲労傾向の比較 (45 歳区切り)

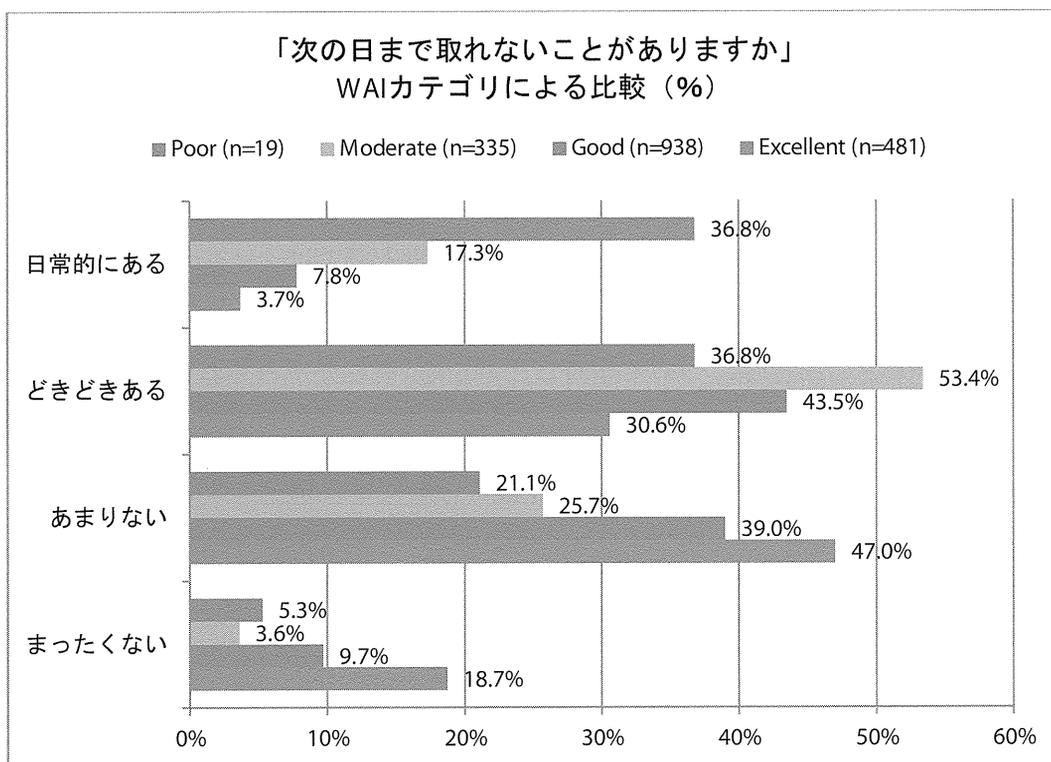


図 4-7 慢性疲労傾向の比較 (WAI カテゴリ)

次にこの設問に対する年齢、WAI、作業条件による影響について検討するため、累積ロジットモデルをリンク関数とした一般化線型モデルにより検討した。応答変数は「仕事の疲れが次の日まで取れないことがありますか」の4水準とし、「日常的にある」を基準とした。説明変数として、職務(3水準;主に体を使う作業である・主に頭を使う作業である・体と頭の両方を使う作業である)、繰り返し作業の頻度(4水準:ほとんど同じ作業の繰り返し・半分程度は同じ作業の繰り返し・繰り返し作業は少ない・繰り返し作業はまったくない)、重量物(10kg以上)の取り扱い頻度(3水準:多い・少ない・全くない)、業務を行う場所(3水準:屋外・屋内・屋外と屋内が入り混じっている)、仕事時の主な作業姿勢(立位・座位・中腰・歩行が多い・運搬機械)、年齢(連続変数)、WAIスコア(連続変数)を用いた。その結果、有意なモデルが得られた(尤度比 χ^2 乗値=331.036、自由度=11、 $p < .001$)。用いた説明変数のうち、重量物の取り扱い頻度は有意ではなかった($p = .161$)。各説明変数のWald χ^2 乗値のうち、最大であったのは、WAIスコアであった(Wald χ^2 乗値=160.285)。次いで、年齢(Wald χ^2 乗値=74.652)、繰り返しの頻度(Wald χ^2 乗値=22.420)であった。WAIスコアの偏回帰係数Bは-0.130であった($p < .001$)。これはWAIスコアが高いほど、「全くない」に近い応答をする確率が高いことを意味する。また年齢の偏回帰係数Bは-0.036($p < .001$)であり、これは年齢が高いほど「全くない」に近い応答をする確率が高いことを意味する。また繰り返しの頻度の偏回帰係数Bは、「繰り返し作業は少ない」を基準として、「ほとんど同じ作業の繰り返し」において0.823($p < .001$)、「半分程度は同じ作業の繰り返し」において0.424($p = .010$)、「繰り返し作業は少ない」において0.262($p = .088$)であった。応答変数における有意確率はすべて $p < .001$ であった。

表 4-1 一般化線型モデルの各変数の偏回帰係数 (B)

		パラメータ推定値						
パラメータ		B	標準誤差	95% Wald 信頼区間		仮説の検定		
				下限	上限	Wald カイ 2 乗	自由度	有意確率
仕事の疲れが次の日 までとれないことが ありますか	まったくない	-9.026	.5765	-10.156	-7.897	245.163	1	.000
	あまりない	-6.706	.5593	-7.802	-5.609	143.752	1	.000
	どきどきある	-4.026	.5439	-5.093	-2.960	54.798	1	.000
[A3=1]	主に身体を使う作業である。	.321	.1296	.067	.575	6.154	1	.013
[A3=2]	主に頭を使う作業である	.023	.1273	-.227	.272	.032	1	.859
[A3=3]	身体と頭の両方を使う作業である	0
[B1=1]	ほとんど同じ作業の繰り返し	.826	.1852	.463	1.189	19.889	1	.000
[B1=2]	半分程度は同じ作業の繰り返し	.423	.1651	.100	.747	6.572	1	.010
[B1=3]	繰り返し作業は少ない	.262	.1537	-.039	.563	2.903	1	.088
[B1=4]	繰り返し作業は全くない	0
[B2=1]	重量物の取り扱いが多い	.259	.1549	-.044	.563	2.805	1	.094
[B2=2]	重量物の取扱いは少ない	.207	.1177	-.024	.438	3.098	1	.078
[B2=3]	重量物の取扱いは全くない	0
[B3=1]	作業場所は屋外が多い	-.411	.6393	-1.664	.842	.413	1	.520
[B3=2]	作業場所は屋内が多い	-.528	.2016	-.923	-.133	6.863	1	.009
[B3=3]	作業場所は屋外と屋内が入り交じっている	0
年齢		-.036	.0042	-.044	-.028	74.883	1	.000
WAIスコア (尺度)		-.131	.0103	-.151	-.111	162.877	1	.000

2) 「今の勤務時間や休憩時間は適当だと思いますか」

この設問に対して、「そう思う」と回答した者は 1367 名、「ややそう思う」と回答した者は 405 名 (16.2%)、「どちらともいえない」と回答した者は 379 名、「あまりそう思わない」と回答した者は 233 名 (9.3%)、「全くそう思わない」と回答した者は 115 名 (4.6%)、無回答 3 名 (0.1%) であった。

分析対象を 45 歳以上と 45 歳未満の 2 群に分類し、この設問に対する応答との関連性を χ^2 -test により検討したところ、有意差がみられた ($p < .001$)。45 歳未満では「全くそう思わない」「あまりそう思わない」「どちらともいえない」と回答する割合が期待値よりも有意に大きいことが示された。一方、45 歳以上では「そう思う」「ややそう思う」と回答する割合が有意に高いことが示された。

同様に WAI カテゴリとの関連性について検討したところ、有意差がみられた ($p < .001$)。Excellent では「そう思う」と回答する割合が期待値よりも有意に大きいことが示された。一方、Moderate では「どちらともいえない」「あまりそう思わない」「全くそう思わない」と回答する割合が期待値よりも有意に高く、Poor では「あまりそう思わない」「全くそう思わない」と回答する割合が期待値よりも有意に高いことが示された。

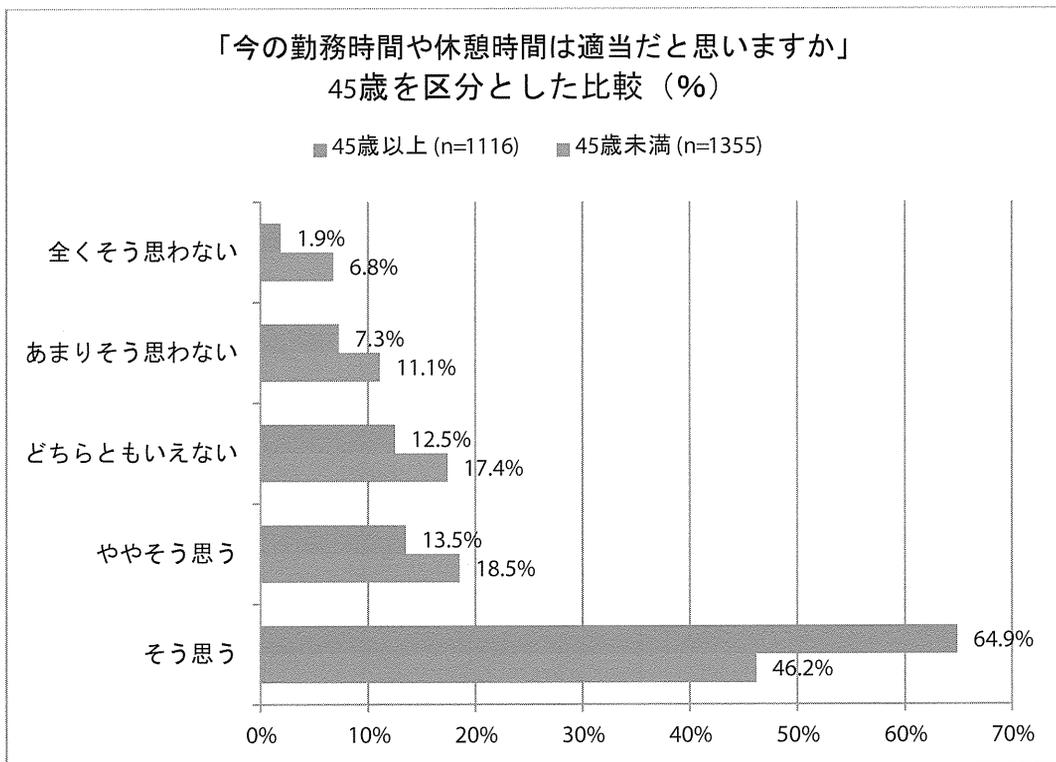


図 4-8 勤務時間・休憩時間に関する満足度の比較 (45歳区切り)

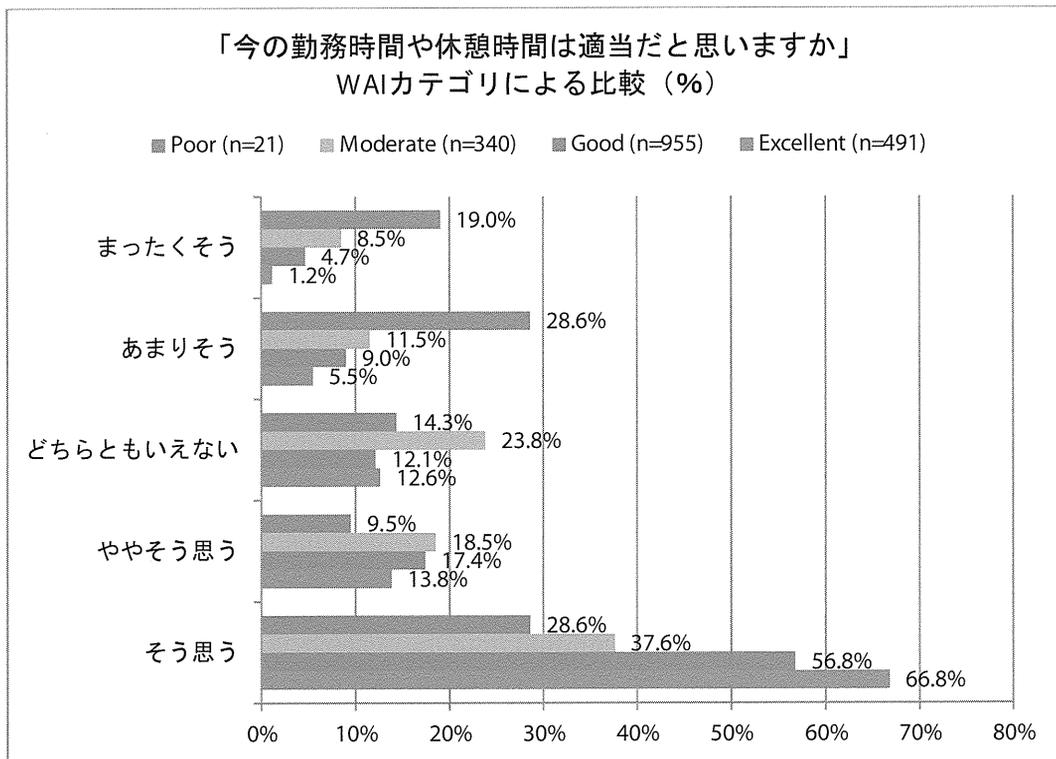


図 4-9 勤務時間・休憩時間に関する満足度の比較 (WAI カテゴリ)

4-3-5. ヒヤリ/ハットの経験

「あなたは、最近1年間に、仕事中に『ひやり』としたり、『はっ』としたりした体験がありましたか」という設問に対して、「なかった」と回答した者は1276名(51.0%)、「1回あった」と回答した者は478名(19.1%)、「2回以上あった」と回答した者は716名(28.6%)、「実際にケガをした」と回答した者は17名(0.7%)であった。無回答は15名(0.6%)であった。

分析対象を45歳以上と45歳未満の2群に分類し、この設問に対する応答との関連性を χ^2 -testにより検討したところ、有意差がみられた($p=.004$)。45歳未満では「2回以上あった」と回答する割合が期待値よりも有意に大きいことが示された。一方、45歳以上では「なかった」と回答する割合が有意に高いことが示された。

同様にWAIカテゴリとの関連性について検討したところ、有意差がみられた($p<.001$)。Moderateでは「実際にケガをした」と回答する割合が期待値よりも有意に高く、Poorでは「2回以上あった」と回答する割合が期待値よりも有意に高いことが示された。Excellent(489名)のうち、「実際にケガをした」と回答した者はみられなかった。

χ^2 乗検定により、ヒヤリハットの有無と年齢(5歳階級)との関連を検討した結果は有意であった($p<.001$)。「24歳以下」「25~29歳」において「ヒヤリハット有り」の割合は期待値よりも有意に高く(71.3%、59.1%)、一方、「45~49歳」「60歳以上」において「ヒヤリハットあり」の割合は期待値よりも有意に低いことが示された。

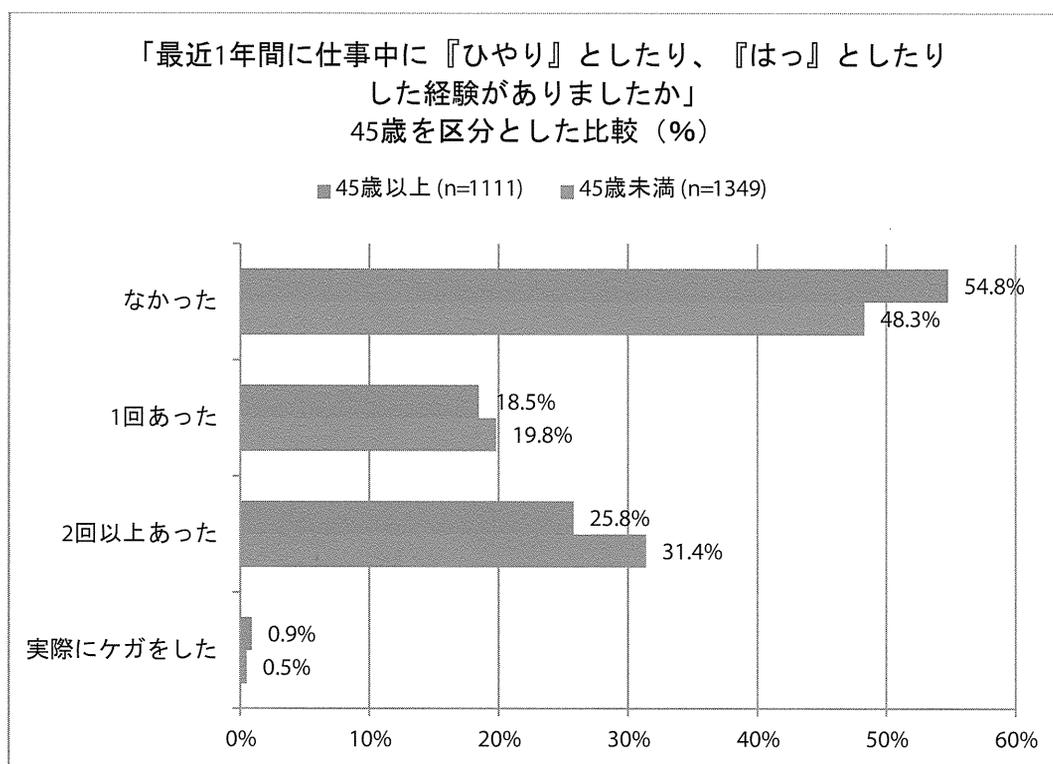


図4-10 ヒヤリ・ハット経験の比較(45歳区切り)

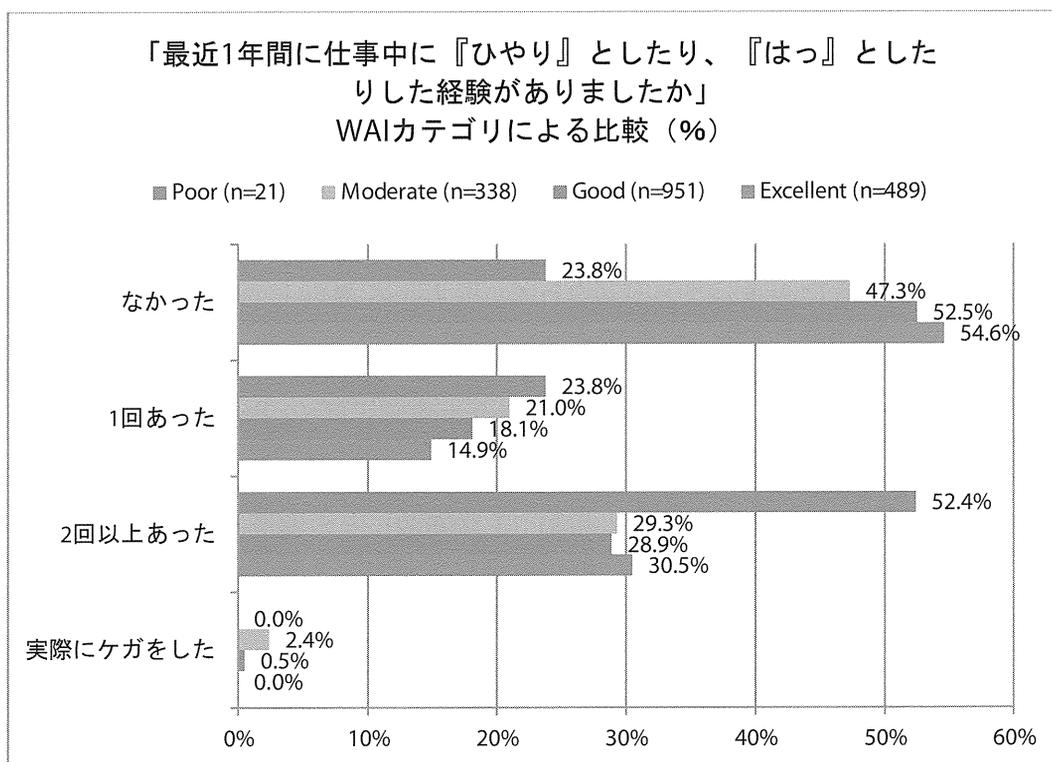


図4-11 ヒヤリ・ハット経験の比較 (WAI カテゴリ)

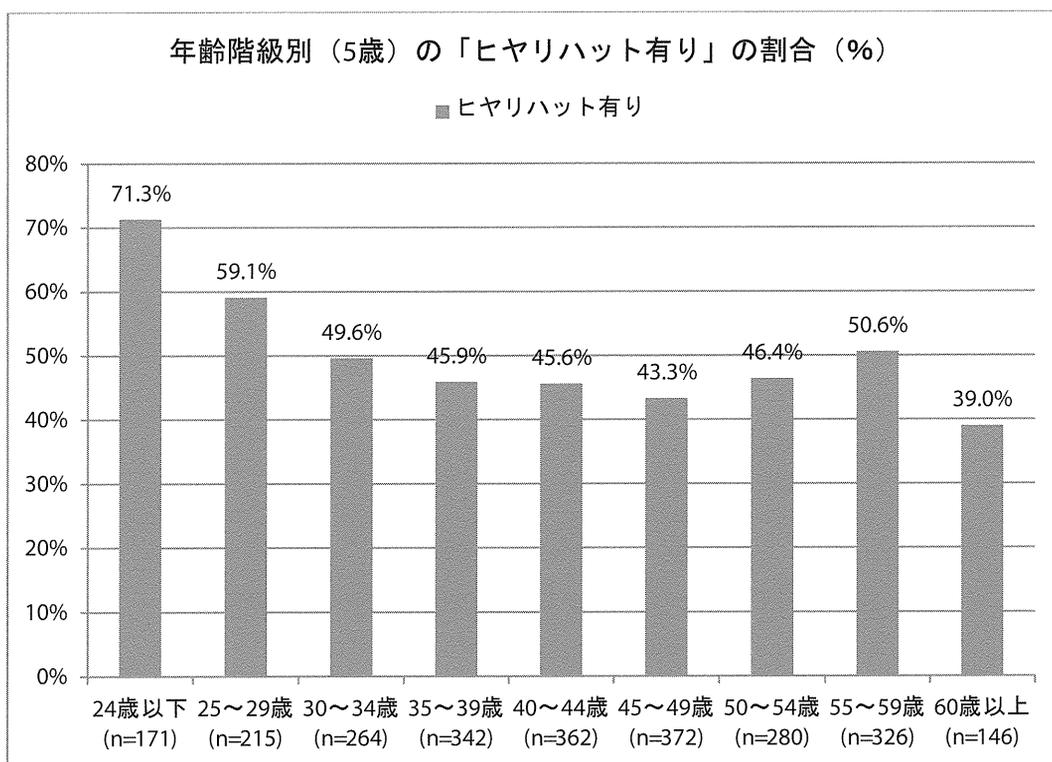


図4-12 ヒヤリ・ハット経験の比較 (5歳年齢階級別)

4-3-6. 就業意欲

1) 「日曜日を休日として残業もないとした場合、現在のあなたが無理なく働くことができると思われる一週間当たりの勤務日数」

この設問に対する応答の平均値は 4.5 日 (標準偏差 1.3) であった。年齢との相関係数は、 $r = -.119$ ($p < .001$)、WAI スコアとの相関係数は $r = .235$ ($p < .001$) であった。

2) 「週 5 日連続勤務とした場合、現在のあなたが無理なく働くことができると思われる一日の勤務時間」

この設問に対する応答の平均値は 8.2 時間 (標準偏差 1.4) であった。年齢との相関係数は、 $r = -.026$ ($p = .189$)、WAI スコアとの相関係数は $r = .267$ ($p < .001$) であった。

3) 「あなたは何歳まで働きたいとお考えですか」

この設問に対する応答の平均値は 62.9 歳 (標準偏差 7.0) であった。年齢との相関係数は、 $r = .300$ ($p < .001$)、WAI スコアとの相関係数は $r = .357$ ($p < .001$) であった。

この設問に対する応答を従属変数、45 歳を基準とした年齢区分と WAI カテゴリを独立変数とした 2 要因分散分析の結果、年齢区分と WAI カテゴリとの交互作用は有意であった ($p = .006$)。また年齢区分の主効果 ($p = .005$)、WAI カテゴリの主効果 ($p < .001$) は有意であった。WAI カテゴリ毎に年齢区分の単純主効果を検討した結果、Poor 以外のカテゴリにおいて有意差がみられた。

4) 「あなたの現在の体力、気力、健康状態などから何歳まで働くことができるとお考えですか」

この設問に対する応答の平均値は 63.5 歳 (標準偏差 7.1) であった。年齢との相関係数は、 $r = .357$ ($p < .001$)、WAI スコアとの相関係数は $r = .290$ ($p < .001$) であった。この設問に対する応答を従属変数とし、45 歳を基準とした年齢区分と WAI カテゴリを独立変数とした 2 要因分散分析の結果、年齢区分と WAI カテゴリとの交互作用は有意であった ($p < .001$)。また年齢区分の主効果 ($p < .001$)、WAI カテゴリの主効果 ($p < .001$) は有意であった。WAI カテゴリ毎に年齢区分の単純主効果を検討した結果、Poor 以外のカテゴリにおいて有意差がみられた。

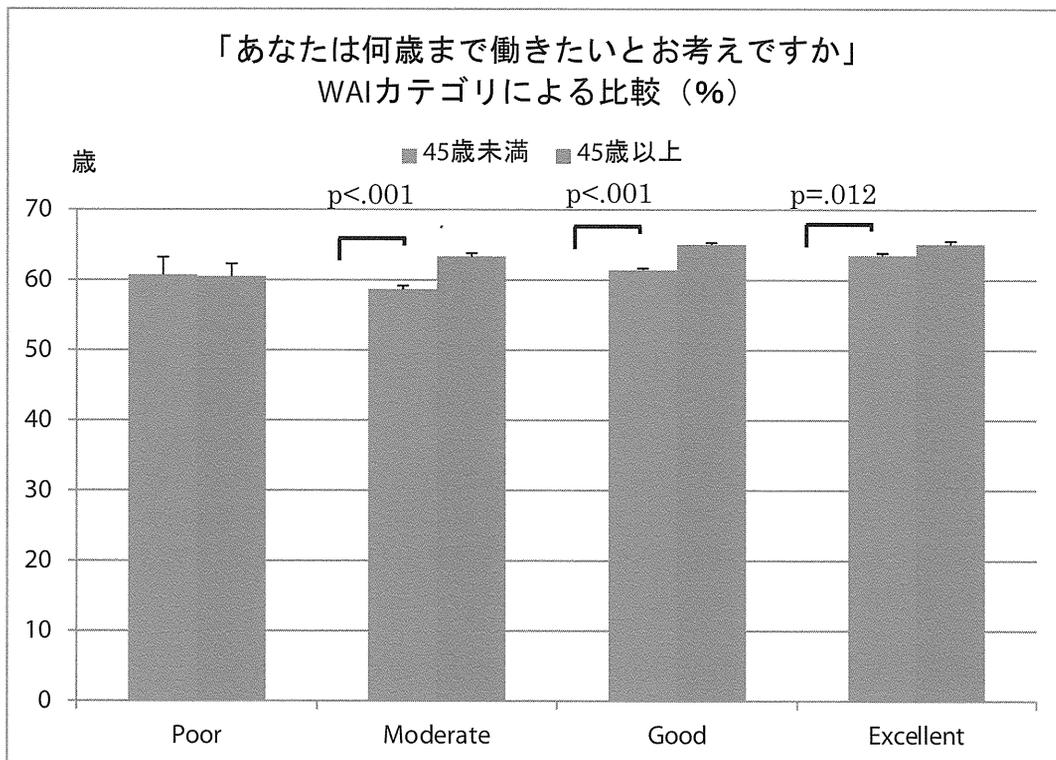


図 4-1-3 労働意欲 (何歳まで働きたいか) の比較 (WAI カテゴリ)